

3 各事務室報告

3.1 図書館総務事務室（旧図書館管理グループ）

事務機構第二次見直しにより、グループ制から事務室へと変更になった。グループ制では図書館の事務を統括する管理職が1名のみであったが、学術・社会連携部の中で、各図書館事務室にそれぞれ管理職が配置され、グループ制以前の事務組織に近い形に戻った。

図書館総務事務室は、旧図書館管理グループの分掌事項をそのまま引き継ぐため、図書館全般の予算管理、契約、交渉等の庶務業務、経理業務、図書受入・整理業務、雑誌業務、図書館システム関連業務および中央図書館の資料発注業務を含め、図書館の管理運営業務の大部分を担当することに変更はない。

3.1.1 助成金取得

2009 年度は、図書館がこれまで補助金獲得の中心としていた私立大学等経常費補助金（特別補助）の申請項目および申請方式が大幅に変更になったことを受けて、獲得補助金額の大幅な減少が想定されている。（2010 年 3 月末時点では未確定）特別補助として新規に申請する事項はなく、昨年度より引き続き貸出機会の増大と読書推進活動の一部について継続申請を行った。

これ以外には、2009 年下半期に追加募集のあった高額資料への補助について申請を行ったが採用には至らなかった。

3.1.2 「ゲスナー賞文庫」の開設について

雄松堂書店より受贈した、書誌・目録の賞である、「ゲスナー賞」受賞作品・応募作品 687 冊の整理を行ない、「ゲスナー賞文庫」として、本年 5 月、中央図書館 1 階に設置した。

この文庫は「ケベック文庫」と共に広く一般公開することとなった。

これを記念して、中央図書館ギャラリーでは「「ゲスナー賞文庫」開設記念展」を行ない、2009 年 7 月 7 日には、中央図書館多目的ホールに於いて、納谷学長、長堀理事長、雄松堂書店の新田満夫 CEO 出席のもと、「ゲスナー賞応募作品寄贈式典」（挨拶：ゲスナー賞審査委員長 紀田順一郎氏）および同審査委員 高宮利行慶応義塾大学名誉教授による記念講演会「本のある人生」を開催した。

また、11 月 10 日～12 日、パシフィコ横浜で開催された「第 11 回図書館総合展」のポスターセッションに「ゲスナー賞文庫・ケベック文庫の一般公開—明治大学図書館の最近の取組み—」として出展し文庫の紹介をした。

3.1.3 2009 年度除籍について

2009 年度除籍は 2 回実施した。第 1 回（2010 年 2 月 19 日）は 2,995 冊（和漢書 1,962 冊、洋書 1,033 冊）、第 2 回（2010 年 3 月 19 日）は 13,029 冊（和漢書 11,881 冊、洋書 1,148 冊）の除籍をそれぞれ行なった。なお、原簿への除籍印の押印については、昨年度と同様に明大サポートに業務委託をし、第 1 回、第 2 回分ともに 2010 年 3 月にまとめて処理を行なった。

3.1.4 博物館図書室の大規模遡及について

博物館図書室の図書の遡及入力については、2005 年度から図書館が整理を担当してきた。図書館受入の新刊書の整理に加え、既存の図書の遡及入力を紀伊國屋書店への業務委託により実施してきたが、遡及作業の迅速化を目的として政策経費により 2007 年度・2008 年度で大規模な図書の遡及を一举に行なった。

図書の遡及がほぼ完了したことから、後回しになっていた雑誌の遡及を 2008 年度後半から実施してきたが、本年度で、予定していた雑誌の遡及入力が終了し、これをもって博物館資料の大規模遡及が完了したことになる。

3.1.5 雑誌集中受入

雑誌受入および受入関連業務は、2008 年度から引き続き(株)明大サポートに業務委託をした。

冊子体から e-journal への切り替えに伴い図書館所蔵分洋雑誌冊子体の受入は減少したが、新たに博物館所蔵分の新着雑誌受入・受入関連業務の委託を開始した。

2009 年度の受入(チェックイン)数は 35,765 件だった。

3.1.6 中村拓旧蔵古地図コレクションの整理

2007 年度図書館特別資料購入費の予算で購入した「中村拓古地図コレクション」(洋書 280 冊,和書 441 冊,古地図等 169 点,マイクロフィルム,パンフレット,抜き刷り,ノート等 15 点)の整理を 2008 年度から開始したが,図書資料以外は整理が難航し,購入した年度内での整理が完了できなかった。そのため蘆田文庫研究会と協議を重ねて,ようやく本年度で整理が完了した。

3.1.7 時田昌瑞ことわざコレクションの整理

2008 年に,ことわざ研究家として著名な時田昌瑞氏のことわざ関連の蔵書及び資料(皿,掛け軸など)等約 2,000 点の寄贈を受けた。さらに 2008 年度末には追加の寄贈があった。ことわざ関連資料については,博物館で整理を行ない,図書(和装本等を含む)については図書館で整理を行なった。一般図書は業務委託により整理を行なったが,和装本等については業務委託をせず,職員で整理を行なった。

寄贈を受ける際に冊子体目録を作成することになっており,時田昌瑞氏のアドバイスを受け,博物館,図書館それぞれでデータを作成し,2010 年 3 月に「明治大学図書館・博物館所蔵時田昌瑞ことわざコレクション目録」(B5 判,116 頁)を刊行した。収録点数は,図書 1,832 冊,逐次刊行物 38 タイトル(183 冊),計 2,015 冊であり,ことわざ関連資料は 1,500 点である。

3.1.8 斎藤哲先生旧蔵書の整理

2008 年に故斎藤哲先生(元政治経済学部教授,元図書館副館長)の旧蔵書の寄贈を受けた。旧蔵書を旧図書館管理グループ(現図書館総務事務室)内書架及び第 3 書庫へ運び入れ,重複調査を行なった。次年度の図書整理に向けて政策経費を要求し,本年度に図書館に未所蔵の図書の整理を紀伊國屋書店への業務委託によって行なった。

図書館に受け入れた旧蔵書は,ドイツ史,ドイツ経済史,ジェンダー関連の図書が中心で,総数 2,443 冊に及ぶ。

3.1.9 新学部・新研究科設置図書費及び学習用複本購入図書費

国際日本学部,情報コミュニケーション研究科,教養デザイン研究科,理工学研究科新領域創造専攻の設置に伴い,2007 年度から 3 ヶ年計画で,それぞれの分野に関連する図書を購入した。しかし,これらの図書購入費については,以前のように別途予算が追加されるのではなく,通常 of 図書費の予算内に含まれているため,学習用図書費,研究用図書費等の縮小が余儀なくされ,大きく影響を受ける。3 ヶ年が過ぎたため,本年度でこの新学部・新研究科設置図書費は終了することになった。

3.1.10 整理業務・装備業務(受入装備・配架装備)の見直し

①業務委託

2009 年度で,整理・装備業務委託業者の見直しをしなければならないこととなり,現行業務,仕様書等の全面的見直しを行った。事前に委託仕様の説明会を実施し,入札を行った結果,和書・洋書目録ともに,次年度より委託業者が一斉に変更されることとなった。過去においては,和書・洋書が別々に業者委託されていたため,一斉変更は初めての経験である。

2010 年 4 月からの委託業者一斉切り替えに備え,1 月中旬から 3 月まで間,業務の見直し,業務フロー・マニュアルの整備,委託業者との打ち合わせ,研修を行い,4 月からの業務に支障のないようできる限り準備を行った。

②整理業務の今後の課題

2000 年 10 月より開始した業務委託の拡大は、約 10 年を経た現段階では最大値に近い状態となった。また、2008 年度には、雑誌受入業務の委託を整理部門に吸収し図書とは別の委託業者に委託している。非委託資料は、図書・雑誌ともに、特殊言語資料、貴重資料、マイクロ資料、AV 資料、明大文庫等、イレギュラーなものを残すのみとなり、委託の拡大に伴い整理業務に携わる専任職員数も年々減少してきた。このような状況の中で、今後、整理部門に携わる専任職員に求められる業務・専門性とは何かをあらためて見直す時期となっている。専任職員は図書館の書誌 DB を一定の水準に維持していくためのスキルを持つことは当然であるが、それとともに、古典籍、漢籍、稀覯書の整理や解題の作成、また電子化を含めた特殊コレクションの整理・公開方法などにも積極的に貢献していくことが今後の課題であろう。

3.1.11 外国図書の充実について

2007 年度大学基準協会認証評価結果において、本学図書館に対し「学部では外国図書の不足」「図書購入費の不足」が検討すべき課題として指摘された。図書館図書費は本年度も増額されておらず、外国図書購入の多くを占める研究用図書費は、専任教員 1 人あたり 10 万円強となっており、前年度と比較して減少傾向にある。本年度から 3 ヶ年の計画で政策経費を要求したが、実際に予算を獲得できたのは要求額の 15%にも満たなかった。また、この予算の執行については、諸般の事情があり遅滞してしまい、年度末近くになって選書・発注を行なうことになった。

3.1.12 システム関連業務

本年度の図書館におけるシステム関係の大きな動きは、2010 年度に予定している図書館システムソフトウェアの更新に関する検討を行ったことである。検討開始時点では現在運用中の富士通社製「iLiswave」はすでに導入より 10 年以上が経過しており、製品保守の観点からも早期の入替えが必要であった。そこでまずは本学図書館と同等規模の図書館の運用実績があり、かつ必要最低限の機能を実装しているソフトウェア 3 製品を選択し、システム担当とそれ以外の図書館員を含む検討 WG を設立し、次期図書館システムソフトウェアの選定を行った。選定に当たっては、各製品のプレゼンテーションを実施していただき、実際にすでに運用を開始している図書館への視察も行った。選定は評価項目ごとの無記名加点方式での採点の結果、最高点を獲得した富士通社製「iLiswaveJ」を次期図書館システムに決定した。採点以外に各システム・機能ごとに意見の取りまとめも行ったが、各システム共にそれぞれメリット/デメリットがあり当初の想定よりも各製品間の差は僅かであった。

また、定例作業の一環としてリース期間満了となった図書館内設置の OPAC 専用機器のリプレイスを実施した。前回の導入時に通常コンピュータによる運用から、シンクライアントへとシフトしているが管理・運用の面から今回のリプレイスでもシンクライアントシステムを採用している。前回のリプレイスより 5 年が経過しているためシンクライアントシステムを構成するソフトウェア・ハードウェア共に多くの改善が施されており、より安定した運用が可能となった。

新和泉図書館建設に関する情報・システム関係の検討も開始した。まずは建物設計に大きく依存するネットワーク関連を中心に検討を進めている。

3.2 中央図書館事務室（旧中央図書館グループ）

中央図書館は、2001 年 3 月 16 日に新築開館以来、9 年余りが経過した。2009 年 3 月 18 日開催の理事会において、事務組織規程及び事務管理職職務権限規程の一部改正が承認されたことに伴い、4 月 22 日に事務機構第二次見直しが実施され、それまでの中央図書館グループから、中央図書館事務室へと変更になった 2009 年度の開館日数は、336 日間で、館内整理のための月末休館日は、6 日間だった。

3.2.1 休日開館におけるサービスの拡充について

休日開館におけるサービスは、要員配置の都合から、セルフサービスが基本となる。しかし、2008 年 11 月以来、入庫、貸出、予約・配送の受渡、ノートパソコンの利用等について、業務委託でサービスを実施している。現在困難なサービスについても、拡充の可能性を検討したい。

3.2.2 図書の返却窓口の現状

利用者から図書返却窓口が、地下 2 階貸出しカウンターでは不便だという指摘を受けた。紆余曲折の結果、現状は、図書返却の窓口は、1 階レファレンスカウンター、1 階エントランスの返却ポスト、地下 2 階貸出しカウンターの 3 箇所となっている。そのほか、図書返却は、和泉・生田地区の図書館や郵送でも可能であり、利用者の不便解消の一助となれば幸いである。

3.2.3 各種図書館ガイダンスの実施

例年のとおり、新任教員ガイダンス、ゼミツアー、フリースター、大学院・専門職大学院・法科大学院の新入生ガイダンス、文学部 3 年次生ガイダンス、留学生ガイダンス、情報検索講習会等を実施した。これらの参加延べ人数は 2,847 人で、2008 年度に比べてほぼ横ばいの状況だった。データベース講習会、テーマ別の各種講習会の参加者は、2008 年度の 148 人から 264 人に増加した。利用者総数は 955,701 人で、前年度に比して 69,833 人増加した。今後とも、広報（ホームページ、掲示、館内放送）の充実を図り、サービス拡充に努めたい。

3.2.4 明治大学の図書館リテラシー教育とプログラム評価活動ポスター展示

国立情報学研究所主催のオープンハウスで、6 月 11 日、12 日に「明治大学の図書館リテラシー教育とプログラム評価活動」のポスター展示を開催した。「図書館活用法」の授業内容を公開する「デジタルコンテンツ」のデモを交えながら、図書館リテラシー教育取り組みの概要、および図書館活用法プログラム評価について紹介した。

3.2.5 中央図書館ギャラリー展示

中央図書館ギャラリーの展示実績（2009 年 3 月～2010 年 3 月）は、下記の 5 本だった。

第 30 回「書物、その構造の美」（共催：東京製本倶楽部、3 月 6 日～4 月 25 日）、第 31 回「『ゲスナー賞文庫』開設記念展」（協力：榊雄松堂書店、6 月 3 日～7 月 8 日）、第 32 回「図書の文化史（2009）」（7 月 15 日～9 月 25 日）、第 33 回「阿久悠展—君の唇に色あせぬ言葉を—」（協力：㈱オフィス・トゥー・ワン/㈱阿久悠、10 月 15 日～2010 年 1 月 31 日）、第 34 回「新収貴重書展」（3 月 24 日～4 月 28 日）。ギャラリーは、図書館総務事務室員・中央図書館事務室員の 7 名で運営され、各展示が好評を博した中で、「阿久悠展」はマスコミに記事が掲載された。また千代田区内の博物館のコンソーシアムである「千代田区ミュージアム連絡会」に加盟した。

3.2.6 各種イベントの開催

多目的ホールは、通常、電卓使用者優先席として利用されているほか、下記のとおり各種のイベント会場として活用された。①図書館の蔵書とサービスを語る会例会（6 月 12 日）、②ゲスナー賞記念式典・講演会（7 月 7 日）、③アフリカ文庫講演会（10 月 9 日）、④「図書館職員合同研修会」（2009 年 11 月 30 日）等の図書館行事が開催された。⑤そのほか司書講習集中講義、法律図書館連絡会総会（10 月 16 日）、全国図書館協会大会（10 月 30 日）、日本図書館情報学会（10 月 31 日）、入学試験等の会場として使用された。初めて「一日館長体験イベント」を企画し新聞で周知し、7 月 30 日に小学生 2 名が「一日図書館長」として大学図書館の業務を見学体験した。

3.2.7 施設・設備の保守管理

地下 3 階マイクロフィルム搬送機・ダムベーターの故障修理、閲覧用椅子のクロス張替え修繕等を行った。中央図書館地下 2 階通路～記念図書館書庫への接合部における漏水は、中央図書館開館以来の懸案事項であり、すみやかに再修繕を検討したい。

3.2.8 大学主催「環境展」への協力

「環境展」（会場：リバティタワー 1 階、会期：12 月 7 日～11 日）において、図書館所蔵の環境

問題関連図書のリストを配布した。内容は、2009 年度に本学教員が執筆した環境関係図書(47 冊)のリストであり、同時に当該図書を図書館入口に展示した。

3.2.9 ローライブラリーの開館日数増と法学研究科院生の利用促進

2008 年度に引き続き、ローライブラリーの開館日数増を推進した。すなわち中央図書館の休館日にも、ローライブラリーは 10 時から 17 時まで開館した。また 2009 年度から、法学研究科院生の入館手続きは、法科大学院生と同様に、学生証提示で取り扱い、手続きを簡素化した。

3.2.10 書庫入庫の自由化・館内秩序の維持対策

すでに地下 2 階書庫(記念図書館地階)・地下 3 階の自動書庫は、入庫フリー化が実施された。セキュリティ対策として防犯カメラ 3 台の設置、館内巡回を行い、秩序維持に資した。

3.2.11 参考図書の一部移転作業

1階のレファレンスブックエリアの一隅に、「ゲスナー賞文庫」を開設した。これにともない、排架スペースを確保するため、参考図書の移動が必要になり、生田保存書庫への移転作業を行った。

3.2.12 投書への回答

2001 年の図書館オープン以来、投書箱を設置して利用者の声に耳を傾け、図書館サービスの改善・向上に努めてきた。約 100 件の投書があり、昨年度比で 40 件増加した。50 件近くが、施設・設備や利用条件の改善要望に関するものだった。それらのうち、色覚弱者向け掲示の刷新、館内の右側通行化、マイクロプリントリーダーの新機種導入は実現した。そのほか即時に改善可能な要望に対応した。次いで約 25 件が、騒音・私語・飲食喫煙等の利用者のマナー違反への苦情だった。また利用者を学生・教職員に限定して欲しいとする意見もあった。今後とも閲覧環境の維持向上に努めるとともに、不心得な利用者には厳正に対処したい。また図書館サービスを評価した投書が、約 10 件あったことを明記したい。

3.3 和泉図書館事務室(旧和泉図書館グループ)

3.3.1 業務体制と人事政策

数年来の事務機構改革の中で本年度は専任職員がさらに 1 名削減となり、5 名体制となった。この影響をものに受けたのが、図書館リテラシー教育である。とりわけ年間 170 回以上の図書館ゼミツアーの要員確保が困難になり、業務受託者にかかなりの負担をお願いすることになった。また事務管理職もリテラシー教育の担当要員となり、さらに業務担当として一般職の業務を兼務することになった。たとえばレファレンス・カウンターの補助業務やゼミツアー、蔵書管理業務などである。これを機に図書館の実務経験者が図書館管理職を担うことが、人員削減及び業務の効率化で最適であることが確認できた。しかしながら、この状況は永続できるものではなく、図書館実務経験のない事務管理職が配属された場合には即戦力とはなれず、現状のままでは業務運営が停滞する恐れがある。

3.3.2 和泉キャンパス新図書館(仮称)と業務運営

和泉キャンパス新図書館(仮称)建設に関する業務が飛躍的に増大している状況において、専任職員の増員どころか減員にせざるを得ない事情があった。しかしながら、この逆境をばねにして利用者サービスを停滞させないために館員は工夫を重ね、担当業務に固執しないで互いに協力を惜みず、全体的視野に立って努力した一年であった。その一翼を担ったのは派遣職員であり、レファレンス・カウンターサービス補助要員として 1 名採用できたことである。これにより、専任職員が図書館リテラシー教育に専念できる時間が増えた。しかしながら、新図書館建設に関しては、会議・出張が増加したため、レファレンス・カウンター業務のための時差勤務体制を維持することが困難になり、残業時間が増大する結果となった。そこで、年度途中から夜間のレファレンス・カウンターサービスを業務委託することにした。

3.3.3 代替施設移転のための蔵書の除籍

和泉キャンパス新図書館(仮称)への蔵書移転に先立ち、代替施設における蔵書収容能力が課題となった。そこで、除籍基準に照らし合わせて積極的に除籍を行い、12,435冊を除籍した。

2010年度もさらに除籍を推し進め、書架設備の有効活用に貢献したい。

3.3.4 新入生ガイダンス

全学部の新入生ガイダンス時に図書館利用案内(約30分)を実施した。本年度は新入生向けの図書館ガイダンスの目標を「印象づけ」と明確に設定し、従来の利用案内パンフレットを中心とした説明から、DVD『情報の達人』第1巻第0講「図書館へ行こう!」の上映(15分)とパワーポイントによる説明に内容を変更した。これにより、単なる図書館の利用説明から、図書館を中心に情報を入手して活用する「情報リテラシー」の大切さを実感させ、図書館が情報リテラシーの拠点であることを印象づける内容となった。また、館内フリーツアー、2008年度から開始し好評だったスタンプラリーを継続実施し、新たにDVD『情報の達人』第1巻の館内での上映会を実施した。

3.3.5 杉並区図書館ネットワーク

杉並区図書館ネットワークは杉並区民や区内参加大学図書館利用者への開放(閲覧・貸出)を実施している。区民及び利用者へのライブラリーカード発行枚数84枚、入館者数延1,968人、貸出冊数682冊となっている。また同ネットワークの企画事業として毎年講演会を開催しており、本年度は和泉図書館が当番校であった。そこで『古文書の愉しみ』(講師:伊能秀明中央図書館事務長)を企画し、11月14日に杉並区立中央図書館視聴覚ホールで開催した。参加者からは連続講義を望む声が数多く寄せられ、生涯学習の拠点としての大学図書館の役割を再認識するものであった。なお、当日の参加者は32名(収容人数50名)であった。

3.3.6 シラバス図書運用の改善

シラバス図書の発注は迅速提供を第一の目的として行っているが、配架までに日数を要することが課題であった。本年度は抜本的な改善を目指し、各地区発注担当者とも協議の上、シラバスの購入方法を改定した。その結果、これまで行ってきた他地区に加え自館の既存資料との重複チェックも廃止し、購入費目を一律とすることとなった。これらの変更は委託書店の負担を軽減し、配架までに要する時間を大幅に短縮することに成功した。

3.3.7 利用者サービス(接遇)の改善

和泉図書館は施設・設備が老朽化しているために、利用環境面で苦情が絶えない。

投書の回答では施設の根本的な改善はできなくても、館員の接遇態度で利用者の心を和らげるという回答をしたところ、施設だけでは図書館の質は決まらなないと利用者也賛同してくれた。秋以来、開館と同時に入館ゲートで専任職員が「おはようございます」の挨拶を励行し、その姿勢が評価されたものと確信し、サービスする精神を今後とも培い、新図書館のソフト面の向上に貢献したい。

3.3.8 その他

利用者の声を反映するために投書箱を設置している。本年度の投書は23件であった。一方、オンラインナレッジサービス経由の要望は、和泉図書館回答は1件のみであった。要望の大半は、開館時間の延長、開館日の増加、環境整備(冷暖房、音漏れ)、図書装備のあり方である。また、新図書館への意見が数多く寄せられたのも特徴である。新図書館建設では、これらの要望・意見を取り入れて利用者の満足度を高めるための工夫を行いたい。

3.4 生田図書館事務室(旧生田図書館グループ)

本年度も夏季・春季休暇中に施設の大型改修,設備・機器の更新・新規設置が行われた。ここ数年順次行われた各種改修工事等と合わせ,図書館内部では空間・設備両面において学習・研究環境が大幅に向上した。

3.4.1 各種改善工事

①全館のカーペット張替え工事

1969年の開館及び1989年の増築時以来使用し,磨耗やシミが目立った床面カーペットの全面張替えを実施した。工事中も図書館機能を維持するため,工期を夏季・春季休暇の2回に分け,いずれも館内の半分を閉鎖して行った。特に正面玄関のある旧館側の工事に際しては,図書館裏側の職員通用口を利用者用臨時出入口とし,貸出カウンターも同所に設置するなどして対応した。

②グループ閲覧室へのプレゼンテーション機器及び無線LAN設備の設置

グループ閲覧室1及び2にパソコン及びプレゼンテーション機器が設置された。また,6室全てで無線LANが利用できる環境が整備された。これにより多様なグループ学習が可能になるとともに,グループ閲覧室を利用したの情報リテラシー教育の内容充実化が図られた。

③研究者用個室,マイクロ閲覧室及び会議室の改修

研究者用個室3室とマイクロ閲覧室の壁の張替え及び照明器具の交換,会議室の壁・天井の塗装,照明器具とブラインドの交換を行った。

④閲覧室の整備

第2開架閲覧室への4連単式6段書架2台の新設及び猿楽町校舎から5連複式書架6台の移設。また,書架間照明の新設,新聞閲覧台2台の増設,木製閲覧椅子364脚の座面布地の張替え,マイクロフィッシュ用キャビネット2台の更新を行った。

3.4.2 「Gallery ZERO」の展示

「Gallery ZERO」の運用は2年目を迎え,研究成果の発表及び文化・情報発信の場として一層の定着を見た。実施した展示等企画12件(学部・研究科等企画10件,図書館企画2件)の内容はいずれも盛況で,学外からの来場者も多数あった。2009年度においては,出品者やコーディネーターによるギャラリートーク2件や,川崎市多摩区長を招待して学生による公共施設設計作品への講評をいただくなど,展示に付随した新たな利用方法が積極的に展開されたことが特筆される。次年度以降の課題は,理工・農両学部の教員・学生にさらなる浸透を図り,ギャラリー利用者の範囲を拡大していくことである。詳細は「4 主要行事 生田図書館ギャラリー(名称 Gallery ZERO)展示一覧」を参照のこと。

3.4.3 情報リテラシー教育の充実

①農学部食料環境政策学科の「基礎ゼミ」に8回,理工学部機械工学科の「情報処理1」に2回の出講講義を行った。

②図書館活用法の演習授業に大学院生のアシスタントを4名採用した。

③ゼミツアーを20回行い,計233名の参加があった。

④情報検索利用講習会(Web of Science, Scifinder Web, DataStarweb, PDF-2)を全9回実施した。

⑤大学院生による「レポート・論文の書き方」プレゼンテーションを12月9日と12月11日に各40分ずつ実施し,計31名の参加があった。

3.4.4 学習用図書選書

①理工学研究科新領域創造専攻設置に伴う図書購入費の予算措置最終年度。所属教員の選書に基づき,同専攻3系の研究内容に沿った図書を購入した。

②複本購入費(政策経費)の執行2年目。前年度に引き続き教員に購入図書の推薦を依

頼し、必要冊数を購入した。また、過去 1 年以内に貸出予約が付いた図書を抽出し、5 回以上の図書は 3 冊、それ以外のものは 2 冊が書架に揃うよう購入し、予算の 150 万円を執行した。

- ③学習用外国書購入費(政策経費)により理工学系の専門書を約 260 冊購入した。教員の推薦を基に、欧米の有名大学で使用されている教科書・参考書を中心に選書し、生田図書館に振り分けられた 250 万円の予算を執行した。購入した図書は、新たに「生田外国書コーナー」の配置コードを設定して一般図書とは別配架とし、学生が興味を持って手に取る機会が増えるよう配慮した。

3.4.5 配架と配架調整

①特集コーナーの企画

以下のテーマについて関連資料を新着図書コーナー隣の書架に配架し、利用者に読書に親しんでもらう機会を創出した。

- i. 社会起業家
- ii. ダーウィン生誕 200 年記念
- iii. 四季と暦

②配架コードの新設

「生田外国書コーナー」に加え「生田特集コーナー」、「生田ギャラリー」の配置コードを新設した。特集コーナーの定番化や、ギャラリー企画で推薦図書を展示する機会の増加に伴い、図書を所定書架から別置していることを利用者にわかりやすく伝えるため。同時に別置作業の効率化も目指した。

③新書・文庫コーナーの配架調整

新書・文庫コーナーの書架移設作業に伴い、新書・文庫を出版社別に並び換える配架調整を実施した。

3.4.6 理工学部数学科資料室の蔵書点検

通常の蔵書点検作業に加えて、数学科資料室に配架されている約 8,300 冊の蔵書点検を同学科と共同で実施した。

3.4.7 修士論文の取り扱い

生田図書館に保管する理工学・農学両研究科の修士論文については、2008 年度中に閲覧可に方針変更したが、著作者本人による閲覧承諾の明確化が課題として残っていた。これについて、2009 年度から大学院要項に「修士論文の閲覧制度について 本学では、大学で保管する修士論文について、本学大学院学生教育・研究に役立てるため、本学大学院学生による閲覧を許可していますので、予めご了承ください。」と明記された。これを以って本人の承諾があるものと解釈することとした。

3.4.8 川崎市立図書館との相互協力覚書成立

2006 年度から川崎市立多摩図書館との覚書に基づき、多摩区民への生田図書館開放を実施してきた。近隣区への連携拡大の一環として、2008 年度末に開始した川崎市立麻生図書館との連携協議を継続した。この中で川崎市側から、川崎市立図書館7館は一体的に運営されており、区単位での協力というよりも川崎市全域に相互利用を拡大してほしい旨の要望が示され、検討の結果、これを受け入れることとした。2010 年 3 月 19 日、生田校舎において「川崎市立図書館と明治大学生田図書館の相互協力に関する覚書」の調印式が行われ、同年 4 月 1 日より実施することとした。当覚書では、生田図書館利用対象者として、川崎市在住者に加え在勤者も可とした。(但し、満 20 歳以上で川崎市立図書館の利用登録者であることが条件。)